愛和外語学院　第１回公開ラボ（12. 9. 9）
初級授業デザインの真髄にふれよう～『できる日本語』を素材にした対話～

「世界を動かすのは情熱だ」ということばを聞いた時、僕は深くうなずきました。今から数年前のこと、外尾悦郎さんというサグラダ・ファミリアの彫刻家のことばです。

その日の会場は、熱気というか熱というか、たしかな熱さを持っていました。それは何かが生まれる前にある、くつくつとした体温のようなものです。3 時間という対話の場で、人が変わるということがあるとすれば、それは決して考え方を転換したというだけでなく、むしろもっと身体的なところへ響く必要があるのでしょう。

「第 3 課では、語彙がこれぐらいしか入っていないから、これぐらいしかしゃべれないですよね。なのに、どうしてそんなにしゃべることができるんですか。」と対話の始まりの場で、口火を切ったある先生は、対話の終了時、「教師はファシリテーターのような役割なんですね。」と語りました。ここにいたるまでのプロセスを記述することは難しいのですが、そこには知的な転換だけでなく、熱がつたわるように浸透していくさまがありました。

福岡で、教師同士の対話の場をつくり、そこから新しい実践を創りたいと行った第 1 回公開ラボ。対話者として嶋田和子氏におこしいただいた 9 月 9 日。僕は、「さわやかな台風をおこしますよ」とアルクの『できる日本語』担当者に言って、笑われたりもしたのですが、生まれたのは台風ではなく、火山の地底にある熱さのようなマグマでした。

カンボジアからスカイプで参加した先生の感想が届いたので最後に。
「昨日の 3 時間で、今あるものをこわして新しいものを創っていくこをと忘れていた自分に気づかせてもらいました。変える・変わる勇気をいただきました」と。

深江　新太郎

p.s.　カンボジアからのことば（続）
「みなさんの対話を聞きながら、私がここでできることは何だろう、ということがずっとぐるぐると頭の中でまわっていました。それはまだこれから一つひとつの段階ですが、まずは、『できない』に埋もれている『できる』を見つけてやっていくのが大事かな、と思いました」と。